

杜甫行狀記

杜甫行狀記

松田毅堂著

杜甫行狀記

定價 ¥ 270

送料 ¥ 30

昭和三十年十二月一日印刷
昭和三十年十二月十日發行

著者 松田毅

発行者 松田毅

印刷者 札幌印刷株式会社

札幌市北一條西二丁目

発行所 北海詩友社

札幌市南十一條西八丁目

販売所 富貴堂書店

札幌市南一條西三丁目

序

杜甫の生涯はどんなものであつたかを知りたいと私はひそかに懷つていたが、専門学の研究のために余暇もないのでそのまゝになつていた。ところが松田毅堂君が「杜甫行狀記」を脱稿して私に序文を求められた。

久しく待望していた杜甫の生涯を知るによい良書を手にして私の詩藻は心のうちに蘇生するの思ひがした。

多くの詩人は詩聖杜甫の深奥、高遠な詩趣に動かされて、何か近づき難いものにしてしまつてゐる。幸ひこの書によつて親しく杜甫を知る機会を得て血のあたたまる感がした。

松田毅堂君は曩に拙著北海詩談の編修に協力された親しい友人であり、また平常から漢詩に深い趣味をもっている御方なので、この一書が杜甫の詩を愛好する多くの人々に読まれることを希望する。

北の涯からかゝる良書が出版されることは北海道文化の発揚の上からもまことに喜ばしい事と思ふ。

こゝに序文を贈つて同君の為に多幸を祈る。



浣花溪草堂 阿部謙夫素画

目次

序	伊藤誠哉	一
杜甫足跡地図		
杜甫年譜		五
杜甫の真骨頂		一〇
杜甫行狀記		一五
(一) 杜甫の青少年時代		一五
(二) 杜甫、李白を知る		二四
(三) 李白と杜甫の對話(戯曲)		二六
(四) 杜甫長安に居す		三三
(五) 杜甫官途につく		三九
(六) 官を棄て秦州に奔る		四九
(七) 浣花溪草堂に安居す		一〇九
(八) 嚴武公の幕僚となる		一二三
(九) 白帝城下西閣に閑居す		一五〇

(十) 長江を下り洞庭湖に泛ぶ……………一三

(出) 洞庭湖上の杜甫(戯曲)……………一七

(出) 潭州より湖上に泛んで死す……………一八

杜甫の友情……………一八

1李白、2鄭虔、3高適、4岑參、5房琯、6嚴武

肉親者への詩情……………三九

杜甫の家歴と盛唐時代……………三〇

詩、歌、書……………三五

在札有志揮毫

越智貞見書……………三 伊藤誠哉書……………六 田中潜書……………三 村田不二書……………三

山下秀之助書……………七 更科源藏書……………八 林敏雄書……………五 大塩紘書……………九

永井一夫書……………三 町村金五書……………三 越山友之書……………八 手塚六郎書……………七

中島九郎書……………三 金丸吉雄書……………二 福井天章書……………一 三苦茂書……………六

藤松正憲書……………二 阿部謙夫書……………二 石附忠平書……………二 深沢吉平書……………一

古田謙二書……………三 湊盤雄書……………二 高桑達夫書……………二 高岡熊雄書……………一

齋藤七郎次書……………六 三井武光書……………七 伊藤誠哉書……………七 松本春子書……………一

松田毅書……………七 三宅康次書……………八 田所哲太郎書……………三 長谷川幾久雄書……………七

水島久子書……………四 黒沢酉藏書……………七

杜甫年譜

皇紀	西曆	唐朝年号	杜甫伝及参考事項	年令
一三六二	七〇三	中宗嗣聖元	李白生る。日本に大宝律令成る。	
一三七〇	七一〇	景竜四	伯父杜審言死す。年六十五。	
一三七三	七二三	睿宗太極元	杜甫生る。生地。鞏県。	
一三九一	七三三	玄宗開元元	山東より揚子江に出で南京、蘇州、杭州、寧波、三年に亘り巡遊す。	19
一三九五	七三五	〃	長安に赴き貢挙の試験を受け落第す。	23
一三九七	七三七	〃	齊（山東）趙（直隸）に遊ぶ。	25
			父閑は山東の兗州司馬たり。	
			この頃李白に伴して開封にて狩獵す。	
一四〇一	七四二	〃	洛陽に居住約四年。	29
一四〇二	七四三	玄宗天寶元	李白は玄宗に謁し翰林供奉となる。	30
一四〇四	七四四	〃	李白左遷せられ洛陽にて杜甫と会す。	32
一四〇五	七四五	〃	杜甫、李白、高適と共に齊州にて狩獵す。	33
一四〇六	七四六	〃	長安に歸る（妻帯して家を作る）	
一四〇七	七四七	〃	詔に應じて試験を受け落第す。	35
一四一〇	七五〇	〃	この頃より安祿山權を専らにす。	38

一四二	七五	天宝	一〇
一四三	七五	〃	一一
一四四	七五	〃	一二
一四五	七五	〃	一三
		〃	一四
一四六	七五	肅宗至徳元	
一四七	七五	至徳	二

玄宗三大礼を行ふ。杜甫礼賦を献ず。
集賢院に待制となるも任官されず。

悪宰相李林甫死す。何將軍山林に遊ぶ。

楊貴妃の勢力によつて揚国忠宰相となる

杜甫は長安城壁の草屋に居す。

河西尉に任ぜられたるも受けず右衛率府胄曹参軍に任ぜら

る。奉先に赴任す。十一月安禄山叛す。洛陽陥る。杜甫は

鄜州に難を避く。

肅宗の安在所に至らんとして賊に囚はる。

長安に禁固となる。

妻子は鄜州に在り。

六月安禄山の軍は潼関を破り長安を攻む。

玄宗皇帝は揚妃、揚国忠、官女九百騎長安の延秋門を出で

蜀に蒙塵す。

この年の十月房琯の軍は陳陶斜に賊軍と戦ひ大敗す。

四月賊中より脱し鳳翔に至り肅宗に謁す左拾遺の官を拝す

杜甫は房琯のために天子に諫言す。

八月鄜州に至り家族を訪う。

九月広平王は回紇の兵十五万に将となり、肅宗を援け鳳翔

一四八	七五	肅宗乾元元	を出発し長安城の西にて賊將安守忠と香積寺の北澧水に戦ひ賊を破り大捷す。賊首を斬る六万、長安を回復す。 十月九日肅宗長安に帰り杜甫左拾遺の職につく、安祿山暗殺さる、郭子儀の軍洛陽を回復す。 李白は永王璘の反に参加したために潯陽の獄に投ぜられ後夜郎に流さる。 六月房琯左遷さる杜甫は華州司功參軍に左遷され長安を去る七月華州に赴任す。李白大赦により夜郎より岳陽に帰る十一月郭子儀を大將とする皇軍は節度使九軍を合せ二十万を以て賊を鄴城に囲む翌年史思明賊に加担し官軍大敗す。 春華州に帰る飢饉のため官を棄つ秦州に向ふ九月東阿谷に十月同谷に寓す 十二月蜀に向ふ、劍門の險を渡る。歳末成都に到り一寺に仮遇す。 十月李光弼を將とする官軍は敵史思明の軍を河陽に迎え大にこれを敗る。先の宰相房琯は蜀の閬州に隠居す。 成都浣花溪に草堂を卜す。 嚴武公成都尹として成都に來り杜甫を草堂に訪ふ。 反將史思明は史朝義に殺さる。	46
一四九	七五	〃 二	〃	47
一四〇 一四二	七六 七六	〃 三 肅宗上元元	〃	48

一四三	七三	代宗宝应元	七月嚴武公の長安に帰るを送り綿州に至る。肅宗皇帝薨す次で玄宗上皇薨す。 蜀の成都小尹徐知道叛す。 杜甫乱を避け梓州に入る。 冬成都の浣花溪に帰る。再び梓州に移る。 牛頭寺に上る。十一月射洪県、通泉県を巡遊す。 官軍は史朝義の軍を敗る。 閬州に往き冬梓州に帰る。 京兆功曹に任ぜたるも赴かず。 春梓州より閬州に赴き房琯の墓を守る。 嚴武公再び蜀の節度使となり来る。 杜甫浣花溪草堂に帰る。 蜀節度使參謀、檢校工部員外郎に任ぜられ緋魚袋を賜はる 嚴武の幕府にありこの頃より肺患と糖尿病悪し。 杜甫は軍務を帯び嚴武公と共に蜀の各地を巡視す嚴武軍は吐蕃七万軍を破る。 正月幕府を去り草堂に隠居す。 四月嚴武公死す。 浣花溪草堂を離れ南下して戎州―渝州―忠州―雲安に至り	50
一四三	七三	代宗広徳元		51
一四四	七四	〃		52
一四五	七五	代宗永泰元		54

一四六	七六	代宗大曆元	一時こゝに仮居す。 高適（散騎常侍）の死を聞く。 夔州に到る。暫らくこゝに居住す。 城下の西閣に居る。白帝城に上る。秋興八首を作る。 赤甲に移り三月瀘西（夔州に近し）に果林を有する草堂を 卜す。東屯に農事を営む。 杜甫この頃より耳聾す。	55
一四七	七七	二	正月夔州を去り巫峽を出づ三月江陵（荊州）に到る。次で 公安に往き十二月江を下つて岳州に向ふ。	56
一四八	七八	三	正月潭州（長沙）に行く、耒川を溯行して衡州に至る。こ の夏暑氣甚だしく再び潭州に還る。	57
一四九	七九	四	この秋長安に歸らむと思ひつゝ流浪して潭州に止まる。 この頃杜甫は舟中に病臥す。	58
一五〇	八〇	五	四月臧玠の叛起り潭州を去り溯つて再び衡州に到り耒陽に 至る。 秋再び潭州に下り更に岳陽に至らんとし洞庭湖上に死 す。	59

杜甫の眞骨頂

杜甫が詩史といはれているのは彼れの詩は唐時代の歴史を物語るもので唐時代の庶民生活の模様を知ることのできるたゞ一つの資料であるからである。

杜甫は日常の生活をそのままに詩に歌ひ自己の感懷を大担に記述しているからで、しかも虚偽を排し眞實を率直に詩にしている。

當時としては一種の自然派ともいふべき革新派の詩であつた。したがつて杜甫在生中は彼の詩はさして尊重されていない。李白なども杜甫の詩はあまり感心していないようであつた。たゞ彼れの友人達と政治的に盟約した連中はその実感による作詩には深く共鳴していた。

唐時代は儒教の影響が強く自分の私生活などを詩に歌ふものはほとんどなかつた時世であつた。従つて歴史上の人物がどんな人柄であつたかこれを批判することは困難である。

多くの詩句の内容はその目的は為めにする讃辭か、或は為めにする讒言さんげんかであつて、眞實を物語

る詩は杜甫以外には見当らないといつても過言でない。また言論の自由のない専政王国時代であつたので杜甫の詩以外にこんなに大胆に実相を歌っている詩歌も見当らない。全く杜甫の詩は恰も石川啄木のその如く自己の思ふまゝを率直に歌つた詩であつた。然かも詩の格は正しく将来唐詩の手本となつた立派な作ばかりである。日本でも平安朝時代の人物の批判などは今日では全く資料なく断片的なものによつて想像して批判しているに過ぎない。実に杜甫の詩集は唐時代の世相を物語る貴重な史料である。

杜甫の詩歌をとうして唐代庶民の生活の模様がはつきり知らされ、人情、風俗、政事の実相が明確に描き出されたことは実に大きな歴史的收穫であつた。

文章には兎角作りごとが多いものであるが詩歌には多少の着色はあつてもその真情をはつきり把握することができものである。

私がこの杜甫行状記を筆にするに當つて杜甫の詩歌を玩味して歴史的の正否よりその詩歌の真意から生まれる実相に重きを置いて著述を試みたものである。

私は詩聖といはれる杜甫を芝居の人物にして書くほどの創作力もないし、また杜甫の伝記を作つて発表するにもその事実の認定に困難があるので、「杜甫の行状記」として思ひのまゝ記述したに過ぎない。人間杜甫とはどんな人であつたかの問題が幾分でもこの書から汲み取つて戴ければ幸甚である。

杜甫の真骨頂はどんなものか。こゝに断片的に列記して大方の参考に供したい。

一、杜甫は儒家の出身であつて儒教を基として凡ての事物を感得している詩人である。また仏門にも道教にも帰依していないが幾分の信仰はもつていた。杜甫独特の詩境の内に宗教的神韻を含ませて詩を作つてゐる。

一、杜甫は忠君愛国の堅い信念と、民生を憂ふる愛国の熱情はいかなる詩人も杜甫に及ぶことがないほどの熱烈な忠君愛国論者であつた。

一、杜甫は友情に厚く多くの詩は深い友情によつて歌はれている。また親子兄弟に対しての情誼も厚くその人情の美しさを詩のうちに多く残している。ことに妻に対しての純潔な愛情は彼れが道德的高水準の人格者であつたことをよく表現している。

一、杜甫は天然自然を愛し山水風木すべて眼にうつるものを詩の神秘をとらえてゐる。そして旅行を好み放浪の生活をつゞけつゝ詩藻を養つてゐた。

一、杜甫ほど故郷を偲ぶ切な情を詩にしている詩人はいない。彼れの詩にはかならず故郷を思ふ郷愁が歌はれており故郷に帰ることを切望してかなしんでいる。

一、杜甫は感情の強い詩人であつたから一般世間の人のようならつろな御世辞など一つも言はなかつた。また愛嬌などは未塵もない生真面目な態度であつたので何にかユーモアには欠けているように感じられる。従つて詩の大部分が悲慘な蒼凄な氣に満ちたものが多い。

一、杜甫は年三十を超えてからは貧困の生活に十余年を過し浣花溪、夔州^きではやや生活の安定を得たこともあるが、生涯を通しての彼の生活は恵まれていなかった。彼れは貧乏に苦むほど詩興は湧き起つて良い詩が作られた。

一、杜甫の事物を視る心眼は心憎いまで徹底していて真、善、美をたゞちに把握してこれを詩歌としてゐる。

一、杜甫は多小決量で変人であつたように思はれる。衆愚とともに事を処するには彼れの性格がこ

れを許さなかつたようだ。

一、杜甫は酒は好んで飲んだが大酒家ではなかつた。酔えば詩を作り、時には舞ひ、飄々たるものであつた。

一、杜甫は壮年時代騎馬と狩獵が得意であつた。ことに弓は上手であつた。趣味は釣と碁であつた。また庭園作りも好きで樹木を植えることが道樂であつた。

一、杜甫の体格は大きく頑丈であつたが肺病（ゼンソク）の持病があり、糖尿病もあつたので五十才位で耳も聾し頭髮は白くなつた。健康は壮年期を除いては恵まれていなかつた。よく薬草を山中より採つてこれを用ひ、また生活の資として売つていた。

一、杜甫は四十四才の時から唐の戦乱時代に会ひ戦禍の中を放浪して戦争のいかに惨胆なものであるかを知り、戦争の罪惡を強く詩に唱つてゐる。しかし彼れは弱い非戦論者ではなかつた。死を堵して国を守る熱烈な愛國心を抱いてゐた。

一、杜甫の生活は平民的であつた。決して大厦高楼に住むことを好まなかつた。また貧乏でそんな